

名前    テーマ	Aグループ（敬称略）	Bグループ（敬称略）	Cグループ（敬称略）	Dグループ（敬称略）
	佐久間 勇	鈴木 秀和	河口 優美子	鈴木 安夫
	有江 直樹	曾子 京子	高橋 徳治	磯崎 初子
	鈴木 茂	三辻 暁美	岩坂 すみ江	森田 貞二
	川口 泰明	尾崎 睦子	高橋 一守	梶川 敦子
				斉藤 正
富津の認知症のしやすいところ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・福祉施設(社会資源)が充実している。</li> <li>・地域のつながりがある。</li> <li>・市の広報無線がある。</li> <li>・家で過ごせる環境がある。ただし、認知症の人の身体の状態、在宅生活ができるかどうかという点はある。</li> <li>・認知症予防の環境がある。認知症にならないように社会参加できる。認知症になる手前の人について、生きがい、人の役に立つ環境がある。民生委員から、母と子ども一人という世帯で、日中は子どもが仕事に出て、母が家で一人という世帯の報告があった。そうした方でも社会参加できる。</li> <li>・一般(認知症でない)人と認知症の差別がない。一般の人が認知症の人との接し方を認識している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・暮らしやすいところ、暮らしにくいところ分けずに話し合った。</li> <li>・認知症の方がどういう方か見当がつかない。オレンジリングを持っているが活かされていない。</li> <li>・要介護3～5の比較的重症な方の対応をお願いされてれも、専門的なこともわからず戸惑う。とっかかりがわからない。</li> <li>・同じ富津市内でもつながりがある地域とない地域があるので、地域ごとに対応が違ってくる。</li> <li>・昔のように「出かけてくるからちょっと(高齢者等のことを)見ておいてね」という環境ではない。</li> <li>・そのため、もう少し声をかけ合えるまちだったら良い。</li> <li>・近所に迷惑かけたくない、個人情報絡みから、声の掛け合いもしにくい地域もある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・認知症の方というより、高齢者全般を対象に話をした。昔からの住民は、隣近所の意思疎通ができています。具体例は、次のとおり。</li> <li>*隣の家の窓が開いていないと、どうしたのかと電話がかかってくる。</li> <li>*姿が見えないと入院したのではないかと気にかける。飼っている猫のエサやりを近所の人がやってくれる。</li> <li>・上記のように、何気ない見守りができているのが、仲町や東町。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・梶川さんは、母の介護を経験した。母が「財布がない。誰かが持って行った」と言うので、一晩中探した。母にもう一度たんすの中を見るよう言うと、財布があった。次の日から財布がなくなったは言わなかったが、ほかにもおかしいことはあった。しかし、梶川様はおかしいとは母に言わなかった。それは親孝行で、良い経験だったかと思う。</li> <li>・認知症の人のわがままと自分勝手を区別するのは難しい。</li> <li>・本人のこと(意見、希望)をよく聞く。</li> <li>・一つの事件(認知症の人からの要望等)があったときには、必ず解決してあげる。周りの人もそれを感じたら、暮らしやすいまちになるのでは。</li> <li>・イギリスのサッチャー氏も認知症。周りの人が個性と思って見てあげなければならない。</li> <li>・どんな立派な人でも、認知症になる人はなる。</li> <li>・認知症でない人が、認知症の人等に合わせる必要がある。合わられないと、その人にとっては暮らしにくい。それは友人や家族でも同じ。</li> <li>・何を食べたいのか、その人の生活の希望を叶えてあげる。認知症の人が外に出たいと言うのに、家族は(認知症の恥ずかしいと引いて引きずり返した事例があった。恥ずかしいのは、引きずり返した家族だと思う。そうした教育が必要。</li> <li>・各自の人格を認め合う。認知症は脳の症状なので、目が悪くなる、耳が悪くなるのと同じ。</li> </ul>
富津の認知症の方にと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上記とは反対のこと</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・別荘地等へ引っ越してきた新しい住民とのつながりがない。そうした人とも交流を持ち、助けてもらわなければならない時代も来ると思うので、交流の場をつくらなければならない。</li> </ul>	
佐久間氏からの意見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・佐久間氏の行う新町の「いどばたの集い」を広げたい。いどばたの集いを広げ、継承するために組織化したい。そのために、リーダーと取り巻きが必要。</li> <li>・誰がリーダーになるかが難しい。</li> <li>・区長は、なかなか個人情報で入って来ないことが多い。活動のうえでは、区長や民生委員単独ではなく、ふれあい推進員、ケアマネジャーなど地域の関係者が集まって、地域でどんなことが問題になっているのか、どんな人がいるのか、話し合うべき。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いどばたの集いは広めていきたいが、コロナ禍でなかなか広められない。</li> <li>・飯野地区では、今まで集まっていた方が集まることができなくなってしまったので、伝言ゲームをしている。</li> <li>*週に2回、お題を出して回って帰ってくる。ただ伝言を伝えるだけではなく、他の話もつながるので、参加者はとても楽しみにしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>上記を受け、Cグループでは「さみしくないまち」を目指したい。</li> <li>・新しい住民との交流をいつから、誰がやるかという点については、区長、民生委員、ふれあい推進員が音頭を取っていかなければならないのでは。</li> <li>・交流の場をつくる。パトロール隊をつくる。</li> <li>・必要な資源は、区長、民生委員、ふれあい推進員がキーパーソン。</li> </ul>	